

実践報告(Report)

知的障害者のインクルーシブ教育の1事例に 対する保育者・教員養成課程の大学生の反応

——対話を重視したケースメソッド型授業による実践——

**Responses in University Students of the Teacher
Training Course to take a Case of Inclusive Education
of Mentally Handicapped Persons – A Practical
Report based on Case Method Teaching**

畝部 真紀^{*}
UNEBE, Maki^{*}

野崎 健太郎^{**}
NOZAKI, Kentaro^{**}

要 旨

保育者および教員養成課程で学ぶ大学1年生に対して、知的障害者(ダウン症候群)が普通学級で学ぶインクルーシブ教育の実践を紹介し、それを元に議論するケースメソッド型の授業を行った。授業は、趣旨説明(担当教員10分)、事例紹介(話題提供者30~40分)、学生と話題提供者との議論(40分~50分)で構成した。事前学習としてインクルーシブ教育の意味を調べることで、事後学習として話題提供者への意見書の執筆を課した。授業当日の事例紹介や議論では、学生に対し共感および理解を求めるような内容や対応は避け、あくまで事実と正直な考えを伝えることに徹した。この実践は、保育指導法「環境」の授業で2クラスの学生85人(41人と44人)に対し、それぞれ別の日時に同じ内容で行った。同じ内容で授業を行ったにもかかわらず、受講学生の反応は2クラスで異なった。後半のクラスでは、事後学習の意見書でインクルーシブ教育への否定が強く感じられた。後半のクラスでは、看護師配置という医療的ケアが必要な子どもが普通学級で学ぶことの是非について、活発な質疑応答が繰り返された。その際に話題提供者は、インクルーシブ教育に疑問を呈した学生の意見に妥協することなく自身の考えを率直に伝えた。このやり取りの有無が、2クラスで反応が異なった理由であると考えられた。ケースメソッド型の授業では、当日の議論の内容によって受講学生の結論が異なる可能性が示唆された。

キーワード：インクルーシブ教育、知的障害者、ダウン症候群、教員養成課程、ケースメソッド型授業

Key words : inclusive education, mentally handicapped persons, down syndrome, teacher training course, case method

^{*} 学校生活を考える会 カモミール豊田 Camomile-Toyota, A Party thinking the School Life of Mentally Handicapped Persons, Toyota, Aichi, Japan (<http://ameblo.jp/camomile-toyota/>)

^{**} 椋山女学園大学教育学部 School of Education, Sugiyama Jogakuen University, Nagoya, Aichi, Japan (E-mail: ken@sugiyama-u.ac.jp)

椋山女学園大学教育学部紀要 投稿・執筆規程の2による査読付き論文(2013年11月15日受付; 2014年1月16日受理)

1. 背景と目的

著者の1人、畝部は、ダウン症候群（down syndrome）の長男、俊慈を授かり、彼が14歳に至る現在まで分けない保育・教育にこだわってきた。畝部は小～中学校時代に自閉症の同級生と同じ学級で過ごし、通常学級に障害児がいて当たり前という考えが自然に備わった。俊慈は3歳まで京都市で育ち、親の会の母親達から励まされてきた。京都の生活から障害児を分けないという自身の考えが固まり、インクルーシブ教育への確信が育まれた（京都ダウン症児を育てる親の会トライアングル，2011）。俊慈が3歳の時、父親の留学に伴いアメリカのボストンに移った。ボストンでは図書館、公園で俊慈を普通の子として扱ってくれ、ベビーシッターも障害を特別視せず、それはスキー場の託児でも同様であった。ボストンでは、本実践でも鍵となった「心のバリアフリー」という感覚を味わうことになった。帰国後は地域の公立保育園に通い障害について意識することなく過ごした。

ところが小学校入学と同時に様々な困難と圧力に直面し、障害に対する学校現場の認識の欠除と対応姿勢に悩まされることになった。この克服を目指して北村(1987)、片桐(2009)の実践を参考にインクルーシブ教育の理論的な学びを進め、「学校生活を考える会カモミール」を立ち上げた。時には学校現場の理不尽な要求や強制に対して反発することになってしまったが、その理由は、そのような行動に移さねば障害児が普通学級で学ぶことができない現実起因する。以上が畝部の障害児（者）教育と学校現場への背景と問題意識である。

一方、野崎は保育者・教員養成課程での勤務の中で、現在の教育課程（カリキュラム）では、現実との乖離が進むばかりであることを痛感していた。日本の障害児（者）教育は、2007年4月に特殊教育（special education）から特別支援教育（special needs education）となった。これは単なる呼称変化ではなく、従来の「障害の種類と程度」によって分ける（分離・隔離）教育から障害児（者）一人一人の「特別な教育的配慮」を的確に把握し、必要な指導や支援を行っていく時代への移行を意味し、2006年12月13日に国連総会で採択された「障害者の権利条約」の教育の事項に明記されたインクルーシブ教育の構築（inclusive education system）に呼応するものである（柘植，2013，p. ii および p. 164-165）。

インクルーシブ教育が普及していけば、障害児（者）と健常児（者）が同じ学級に在籍し、一人一人の「特別な教育的配慮」についてののみ、取り出し指導や入り込み指導、あるいは専門性を備えた担任で対応するという方向に進むはずである。つまり、特別支援教育により、障害児（者）を健常児（者）と分ける教育から分けない教育への転換が期待される。しかしながら、通常の学校に設置された特別支援学級では、特別支援学校とは異なり、特別支援学校の教員免許を持たなくても担任となることができる。このため特別支援教育に関する教師の専門性は高まらず、必須である個別教育計画の作成に支障が出ている事例も報告されている（杉山，2007，p. 197，p. 206-208）。

特別支援教育となった2007年の特別支援学校在籍者は108,173人、そして5年後の2012年には129,994人であり、21,821人の増加である。この増加数は5分野（視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱）の中の知的障害22,443人の増加で説明することができる。そして小学校と中学校に設置された特別支援学級在籍者は同時期に51,051人の増加である（文部科学省 web site の特別支援教育資料）。この事実は、特殊教育が特別支援教育になり、障害児（者）、特に知的障害は軽度の場合、通常学級から支援学級に分離され、中～重度の場合、地域の学校から分離され、特別支援学校に送られていることを示している。この傾向からは、日本の特別支援教育がインクルーシブ教育の理念に反し、障害の中で最も普遍である知的障害の隔離に進んでいることを読み取ることができる。この流れを食い止めるためには、現場で障害児（者）と向き合う保育者・教師の意識を高める試みを養成課程で行う必要がある（杉山、2007, p. 208-213）。以上が著者の1人、野崎が本実践を立案するに至った背景である。

本実践は、受講学生に知識を伝達する講義形式ではなく、まず障害児（者）保育および教育の当事者からの話題提供（case）を受け、その内容について質疑応答を通じて理解を深めていくケースメソッド（case method）形式で行うことを試みた。話題提供者として、野崎の居住する愛知県豊田市で「障害児（者）と教育のインクルージョン」についてぶれない行動を貫く畝部に依頼した。畝部は野崎から依頼を受け、息子の小学校6年間を通じて「教師」の障害や障害児への関心の薄さ知識の無さに、これからの障害児の（義務）教育に対する不安を覚え、また現代の学生のほとんどが通常学級と特殊学級とに分けられた環境で育ってきていることなどを痛感してきた。以前、他大学の教職課程の学生に話した時に、養成課程で障害について学ぶ重要性を強く感じ、加えて椋山女学園大学が母校という理由で快諾した。本実践では、障害児の子育て体験で良く見られる涙とともに「良い話だった。感動した。」で終わることは避け、受講学生の心に引っ掛かりを残す、つまり、近い将来に保育および教職に就く自分の問題として考えさせることができる内容を目指した。

2. 方 法

2-1. 対象

実践対象は、椋山女学園大学（愛知県名古屋市）教育学部保育・初等教育専修に在籍する1年生84人、初等中等教育専修に在籍する2年生1人、合計85人である。保育・初等教育専修の学生は主に保育職（幼稚園教諭・保育士）、初等中等教育専修は小学校教諭を目指す。実践は、幼稚園教諭・保育士養成課程の必修科目である「保育指導法（環境）」で行った。受講学生85人は、44人と41人の2クラスに分かれており、2013年6月5日（水）、6日（木）にそれぞれ同じ内容で実践を行った。

2-2. 実践内容の立案

本実践は、1) 事前学習、2) ケースメソッド形式の授業、3) 事後学習の3部から成る。事前学習では、①畝部が執筆した発表要旨(A4版1枚)に目を通す、②インクルージョン(インクルーシブ)教育の意味を調べる、③畝部のBlog「若坊守のカモミール日記」を閲覧することを義務付けた。授業当日は、①特別支援教育をめぐる現場での1事例(柘植, 2013, p.6-7)の読み合わせ、②インクルージョン教育に関する事前学習の確認(①と②で10分程度)、③畝部による話題提供(40分)、④質疑応答(30~40分)という構成で行った。事後学習は、①授業を通じて強く印象に残った事柄3点を挙げ、それぞれ理由とともに述べる、②話題提供者の畝部へ自分の考えをまとめた手紙を書く、の2点を課した。

実践全体の主題は「分ける保育 分けない保育—インクルージョン教育の視点から—」とした。話題提供は、「クラスの中で：インクルージョン8年目と半年、その前6年間」と題し、「分けない教育」、すなわちインクルージョン教育について、畝部が長男の誕生から小学校入学、中学校入学と歩んできた道のりを1事例として説明した。特に、「なぜ知的障がいのある子どもを普通学級に入れるのか?」、「学校との連携は?」について保護者の立場から現状について感じることを述べた。

保育指導法(環境)の授業では、開始直後から受講学生を3~4人を単位として10~12班に分割し野菜の栽培、工作、討論等を協同で行わせてきた。そこで、畝部と受講学生との対話となる質疑応答は、まず班ごとに話題提供の内容について話し合わせ、畝部に問う質問、意見を3つ以上用意させた。その後、1班から順に畝部と対話する形式とした。質疑応答は野崎が司会を担当し、必要があれば議論に介入した。以下、実践内容をなるべく詳細に記述した。冗長ではあるが、このような記録が限られていることから資料としての価値が高いと判断したためである。

3. 話題提供の内容

畝部による話題提供は、まずダウン症候群に関する基礎知識の説明から入り、長男誕生から中学校2年に至る事例の報告となった。以下に概要を記す。

長男の俊慈(しゅんじ)は、1999年(兎年)4月8日生まれの14歳です。4月8日は有名人の誕生日です。ヒントは花祭りです。我が家はお寺なのでこの日はとても意味があります。みなさんに私の子育てや、「みんな一緒」で実践してきたことをお話していきます。

ちょっと質問。小~中学校でクラスに障がいを持った同級生がいた人?手を挙げて下さい。けっこういますね。ずーっと朝から帰りまでいっしょでした?途中で抜けたりしなかった?それは特別支援教育とか特殊教育に関することです。それでは、「ダウン症」って何の障がいかわっている人?いませんね。簡単に説明すると「染色体異

常」です。21 番目の染色体が通常の 2 本ではなく、3 本あるのです。原因不明の突然変異で約 1000 人に 1 人、最近では数百人に 1 人生まれていると言われています。ダウン症の「ダウン」というのはアップダウンのダウンではなく、この症例を発見したイギリスのジョン・ラングドン・ダウン博士という医者の名前から取ったものだそうです。その以前は「蒙古症」と呼ばれていました。突然変異で何を思い浮かべますか？「染色体異常」というと負のイメージが強いと思いますが、空き地に生えているクローバー（シロツメクサ）を思い浮かべて下さい。通常は三つ葉ですが、たまに四つ葉がありますね。幸せになるという四つ葉です。あれも突然変異です。

話を戻しますと 1 本多いために様々な合併症があります。赤ちゃんのうちに手術をすれば治りますが、ダウン症の約 4 割に心臓疾患（心房中隔欠損など）があります。他には、弱視、乱視、近視、遠視早いうちからの白内障、耳はだいたい難聴気味で健常児に比べて耳の穴が小さくて慢性中耳炎になりやすく聞こえづらくなります。それから筋緊張の低下。これは筋力が柔らかく、生まれてすぐにお医者さんが気づいてダウン症を疑います。俊慈の頬や二の腕は普通の子よりもふわふわしていますよ。このため、俊慈はなかなか歩いてくれませんでした。普通の子は 1 歳半までに歩行できますが、俊慈は 3 歳の頃でした。2 歳下の妹が 10 ヶ月半で歩いたので一緒にという感じでした。運動神経も良くはありません。それから知的発達遅滞です。そして最大の特徴はみんな顔つきが似ているということです。目がつり上がっていて鼻が低い。これは人種に関係なく仲間を見つけることができます。これは不思議ですよ。白人から見たら「アジア人」顔に見えたのでしょうか。「ダウン症」と名付けられる前に「蒙古症」と言われていた理由です。

中学 2 年生の俊慈ですが、ずっと通常学級に在籍しています。なぜ普通学級かと思うかもしれませんが。私は、小～中学校時代に自閉症の男の子が一緒に学級に在籍していました。彼は、取り出しで算数の勉強に行ったりせず常に一緒にでした。私にとって彼は「自閉症」の彼ではなく同じクラスの S 君でした。「それでいいんだな」と思ったのが俊慈を通常学級で学ばせている一番の理由です。S 君のおかげで今の私があるのかもしれないですね。

俊慈は名古屋で生まれました。産んで 2 日目で「あれ？この子もしかして？」と思いました。中学の同じ学年にダウン症の男の子がいたので、すぐにわかりました。そして運命の告知です。小児科医から「ダウン症」と告げられたとき真っ先に「この子は学校に上がる時普通学級に入れますか？」と聞いたのです。先生は「この子がいて当たり前なのが社会ですよ？」と答えて下さいました。そこで「通常学級でも大丈夫」と勝手に解釈しました。「この子がいて当たり前」、この言葉が私を支えています。

俊慈は 3 才まで京都市で育ちました。5 ヶ月になった頃「京都ダウン症児を育てる親の会トライアングル」に入会しました。そこで先輩お母さん達から「この子たちは成長はゆっくりだけど普通やで。普通に育てたらええねん」「保育園も学校もみんな

と一緒にに行けるので心配しなくてもいい」と励まされました。ここで私の「インクルージョン教育」への根っこがしっかりできました。

なぜ学校現場は障害児とその親に特別支援学級・学校への就学を勧めるのでしょうか？それは、「この子の弱いところや学力を個別指導という形で伸ばしたい」という考えを持っているからです。では、なぜ普通学級を選び、インクルージョンを目指すのでしょうか？「個別で伸ばしてもらおう学力（それも大いに魅力的です）よりも大勢の中で伸びる社会性、協調性を求めているから」なのです。社会性、協調性というのは個別指導で伸びるものではないのです。

3才になるときにアメリカのボストンに移りました。俊慈は、早期教育プログラムの「Somerville early intervention program」で公立のプレスクールに行きました。月火木金は、昼食を持参しスクールバスの送迎で通いました。ST（言語訓練）、OT（作業療法）、PT（理学療法）の訓練も受けました。そして何よりボストンでは心のバリアフリーに触れたなと感じました。例えば、図書館に行っても公園に行っても俊慈を普通の子として扱ってくれました。ベビーシッターも障がいと関係なく引き受けてくれました。それはスキー場の託児でも同じでした。小さい子同士っていうのは時としてハラハラしますが、子ども同士はすぐに仲良くなれるものですね。1年弱でしたがとても充実した子育て期間でした。妹の響子もデイケアに預けて私も学生生活を楽しみました。子育て中に自分の時間を持つなんて日本では考えられませんよ。

帰国した年に運良く豊田市の保育園に入園できました。豊田市は2年保育を推奨しています。おむつがとれ、身辺自立ができてから入園するという考えです。以前住んでいた京都とは違い、3歳児は親が就労していないと入れません。俊慈は自宅がお寺で24時間忙しいので年少から入れてもらいました。小さな地域園だったのでのんびりと園の先生方や保護者に見守られ、お友達と3年間過ごしました。私は保育園が本当のインクルージョン教育だとつくづく思っています。

小学校は、保育園から一緒に過ごした仲間たちと普通学級で学びました。1年生の時に保育園のお母さん達で立ち上げた和太鼓サークルの楽鼓（らっこ）に親子で参加しています。俊慈は太鼓に対して自信を持っています。これが中学校で参加する吹奏楽部の担当であるパーカッションにつながっているのでしょうか。得度も受け、私、妹も一緒に僧籍を得ました。6年生の同じクラスの仲間は悪ガキですが団結力のある頼もしい友人たちです。そして長いようであつという間だった6年間、3月の卒業式は感動的でした。私は息子とのことでほとんど涙が出てくることはなかったのですが、やっぱり卒業生入場のシーンでは感無量でした。

中学校も地域の普通学級に就学しました。去年の体育祭では、クラス全員で走るリレーにも参加しました。バトンの受け渡しが難しいということで、クラスみんなが考えてくれて、何と第一走者になりました。でも応援していて思ったことは、俊慈だけが遅いわけではなく運動の苦手な子もたくさんいるということです。中学1年では、他に宿泊合宿というものがありクラスがまとまる場になります。例えば、クラス

で協力してうどんを打ちカレーうどんを作ったりします。その時には、「教育介護ボランティア」制度を利用しました。これは豊田市の制度で、近隣の大学と豊田市教育委員会が提携し、障がいを持っている子が遠足や修学旅行やキャンプに行くときに、大学生に付き添いボランティアをしてもらいます。実費は市が負担します。俊慈には大学生のお兄さんが配置されました。そして2年生に進級し、2回目の体育祭も終え来週からは職場体験で子ども園に行きます。写真を見て、「俊慈がいて完全な普通学級だ」と感じませんか？

中学校は最後の義務教育の時です。普通学級に入っている限りできるだけ進路もみんなと一緒に考えていますがどうなる事やら。ここは親の努力の見せ所だと思っています。本人の努力だけではどうにもならないことです。本人の成長はもちろんのこと友人たちとの関わりを見ていると私達の選択は間違っていないと胸を張って言えます。私は普通学級に入れて1度も後悔したことはありません。みなさんは保育士、幼稚園や小学校の教員を目指していると思います。できるだけ「分けない」ということを考えていただけたらなと思っています。

4. 受講学生との質疑応答

4-1. 6月5日

質問1：学校から特別に配慮してもらったことはありますか？

回答1：豊田市教育委員会と交渉して、1年生の途中から補助教員が、1日に1～2時間分だけ配置されました。それだけでも親の負担は軽くなりました。1年生の夏休みまでは、登校から下校まで付き添い、配慮と言えば、給食の時間に、「残菜ゼロに協力を」とおかずや（担任の嫌いな）牛乳をくれたことぐらいです。

質問2：受け持つクラスに障がいを持つ子がいたらどのように接したらいいでしょうか？

回答2：これはインクルーシブ教育の課題です。俊慈は、おそらく地域で初の普通学級就学のため私が付き添い支援してきました。3年生の算数でコンパスや分度器を扱いますが、支援学級では教えません。「障がい児には必要ない」という考えが根底にあるためです。「みんなと一緒に」に学ぶこと自体に意味があります。授業中の「声かけ」だけでも意味があります。

質問3：同じダウン症でも「違い」はあるのでしょうか？例えば個性はあるのでしょうか？

回答3：「よく勉強ができる子、できない子」「数字が入っていくけど漢字の読めない子」「おしゃべりが得意な子、不得意な子」など「違い」はあります。おしゃべりだけ何と言っているか分からない子は多いですね。この理由には、口や舌の大きさや耳の聞こえ、知的な問題などがあります。

質問4：今までどのように育ててきましたか？またお母さんの支えはなんですか？

回答4：これまで、京都、ボストン、豊田市に住んできました。複数の場所で子育てができたことは幸運な体験であったと思っています。心の支えは、「普通学級入学」が第1で、私の実母の言葉「育てられないところには生まれない」も大切です。そして、育児を楽しみ、「(ダウン症の子を)1人欲しかったな」や「ダウン症の子がいて楽しそう」と思わせたいです。

質問5：小学校での苦労を具体的に教えて下さい。

回答5：当時の校長が「分ける」ことに熱心な人で、「障がいを持っているんだから通常学級は無理」と言われました。「補助教員をつけてほしい」と頼むと「補助教員は脱走をしてしまう子や教室には入れない子につくもので、特殊学級にいるべき子にはつかない」と言われ、しばらくは私が付き添うことになりました。ある時、「学校からのお願い」という印刷物を渡されたのですが、簡単に言えば、結局、通常学級には受け入れてもらえていないことがわかる衝撃的な内容でした。しかし、これが「きっかけ」となり変化が起きました。私はこの印刷物を複写してあちこちに相談したところ、このような印刷物を保護者に出すことは「いけない」ことであるとわかりました(実は数年後にある団体を通じて文科省にも送られました)。「プールにも一緒に入れ」と要求されました。「俊慈は年少からスイミングに入っていて、水には慣れています。私も一緒に入ったことがないので大丈夫」と返答しても、「危ないから」の一点張りでした。しかも「お母さんが一緒に入らないのなら残念ですが見学ですね」とまで言われたのです。何を言っても聞いてもらえなかったので「もういいです、しかるべきところに相談に行きます」と言ったとたんに校長の態度が変わり、プールサイドでの見守りになりました。もちろん私は何かあればいつでもプールに飛び込む気持ちでいましたが、何事もなく水泳の授業は終わりました。とにかく1年生の時は、ダウン症児が通常学級に入ることが学校にとって「新しいこと」だったので「妨害」があったのです。でも、その1年があったから私は賢くなりました。鍛えられ、支援に感謝した1年でもありました。

質問6：学習面等で遅れが出るとありますが他の親から何か言われたことはないですか？

回答6：俊慈によって授業が遅れたり、邪魔になるということですね？直接言われたことはありません。むしろ学校から「どうせ授業について行けないから出ていってくれ」と言われていたのが、親よりも学校の理解を得ることが大変でした。

質問7：授業中は、聞いているだけでしょうか？与えられた課題をやっているのでしょうか？

回答7：小学校1年生の時は、ゆっくりですが、皆と一緒にやってきました。中学生となった今は、私も付き添っていないのでわかりませんが授業に参加していると思います。私や補助教員がついているときは課題を一緒に解かせたり、解答を教えたりしてやっています。

質問8：評価はつきますか？

回答 8：普通学級では評価がつきます。支援級には通知表がありません。評価をされないことを私は疑問に感じます。たとえ全て 1 でも評価を受けることは大切であると思います。

質問 9：成長に伴い差が大きくなると思いますが、幼児の頃は差が小さいのでしょうか？

質問 9：保育園では、多くの子どもが、「ここはできているが、ここはできない」というでこぼこした発達であり、障がいの有無というのは俊慈の場合にはあまり関係ありませんでした。

質問 10：中学校では、自分だけできないときに悔しがったり悲しがったりしないのでしょうか？

回答 10：授業について行けないという面では多分小学校 2 年から差がついています。しかし俊慈だけができないわけではなく、1 年生の終わりから算数が苦手となる子はたくさんいました。自己認知という面では、中学校 1 年生の吹奏楽部で重要な部分がみんなと同じようにはできないし、先生に指導してもらえなかったことが「悲しかった」ようで、しばらく朝練に行ってなかった時期がありました。放課後の練習には行っていたので、きっと自分の中で「自分だけできないのが嫌だ」という思いがあったのでしょうか。プライドが高いので「できないこと」には手を出しません。自分の中で「できない」と判断したら、なかなかやってくれないのです。

質問 11：「分からない授業を聞いてもつまらない、子どものためにも支援学級に行かせるべきだ。」という考えについてはどう思いますか？（野崎）

回答 11：そのような考えがあっても良いと思いますが、私は違います。小学校 6 年生を思い出してみると、全員が 100 点ではない、という事実を私は重視します。我慢して聞いていたり、寝ている同級生もいました。障がいを持っているから分からないのではなく、健常であっても分からない子はいます。小学校の高学年になると授業も難しくなり俊慈に教えるのも大変でした。みなさんも先生になったときに「ダウン症だから分からない」のではなく、「じゃあみんなはわかっているのか？」という視点から考えていただきたいと思います。

質問 12：悔しかったことは聞いたので、逆に嬉しかったことは何ですか？

回答 12：たくさんあります。まず学芸会の「見せ場」できちんとできた時です。それから小学校 6 年生のさよなら遠足でのことです。その日は雨降りで、同じようにカッパを着て傘をさした子どもが他校からもたくさん来ていたそうです。俊慈は店から出るときに違う学校についていきそうになったのですが、友達が「違う！違う！」と呼んでくれました。その時に他校の児童が「なんだこいつ」みたいな顔で俊慈を見ていたらしく、同級生の悪ガキ 2 人が「俊慈をバカにした！」とケンカを売りに行こうとして、先生に止められたということがありました。嬉しく、ありがたい出来事でした。

質問 13：登下校の手段を教えてください。注意点はありますか？

回答 13：小学校 6 年間は通学団で徒歩でした。3 年生までは私が付き添いました。1

年生の時はランドセルの中身を私が持ち、通学団の上級生に手をつないでもらうことをお願いしました。私はなるべく控えめに支援していました。3年生で妹が入学し、自覚が生まれたのか「ママ来ないで」と言ってきました。それをきっかけに途中まで尾行し、後から自転車で先回りして教室まで見守りました。担任とはその時にやりとりしていました。中学校は、およそ2.3kmの道のりを自転車通学しています。ダウン症の子は平衡感覚が悪く自転車に乗れない子が多いのですが、私は自転車通学にさせようと小学校3年生から練習を始めて、4年生の冬に乗れるようになりました。通学路の危険な箇所が分かるまでは私も一緒に登校していました。

質問 14：普通学級への就学、自転車通学等、目標を持って取り組む姿に感銘を受けました。今、直面している問題があれば教えて下さい。

回答 14：授業料が無償化されたので、できれば公立の高等学校への進学を希望しています。特別支援学校以外を目指しています。障がいがあるから特別支援学校の高等部ではなく、専修学校も含め、多様な進路があると思います。「大きくなったら何になりたい？」と俊慈に聞くと「高校生かな？」と答えるので高校生にすることが今の目標です。

質問 15：通常学級に入れて良かったこと、成長したなと感じることを教えて下さい。

回答 15：周りを見て行動できるようになったことです。

質問 16：(質問 15に関連して)それは集団行動によって身についたと考えますか？(野崎)

回答 16：社会性が身につくのは集団行動ならではだと思います。

質問 17：通常学級で「いじめ」の不安はありませんでしたか？

回答 17：「いじめ」に障がいの有無は関係ないです。私は、「ちょっとできる」「ちょっとできない」子がいじめの対象になりやすいと思っています。逆に、「できなさすぎる子」をいじめたりしません。むしろ保護してくれます。そして、俊慈が「いじめ」を受けてもそれが社会だからと考えています。これから先、進学しても、社会に出ても「いじめ」はあると思います。

質問 18：ダウン症の「親の会」ではどのような活動をしているのでしょうか？

回答 18：「親の会」では、「普通でない子」を生んだ親の心の支援から始まります。毎月定例会があり、赤ちゃん連れが多いです。豊田には「エンジェル」という会があります。会報の発行、お楽しみ会、講演会の企画をやっています。例えば、小学校5年生のキャンプの練習を兼ねて同じ施設でのお泊まり会があります。

質問 19：通常学級には障がいを持った子と関わったことのない子もいると思いますが、理解を深めるためにクラス会(説明会)を開いたりはありませんでしたか？

回答 19：1~6年生まで「俊慈はダウン症でみんなと同じことはできない」と説明したことはありません。できないのも、悪いことをするのも、ありのままの俊慈を見てもらいたかったのです。中学校では、6年間の積み重ねがあるので他の小学校から来た子とのきっかけも、友達たちが橋渡しをしてくれました。学校から説明会を頼まれ

ることもないです。

質問 20：いろんな子がいて社会だから通常学級にいろんな子がいて自然だという考えは「そうだな～」と感心して聞いていました。しかし素敵なお母さんがいて、本人もすごくがんばれる子で、クラスに 1 人しか障がい児がいなくて、というようなある程度の条件が整わないとそれは難しいのではないかと、2 人も 3 人も障がいの重い子が入ってきたりしたときに本当に通常学級が成立するのか？ということを感じました。また、周りの子ども達にとって良い効果があるという話しでしたが、本人の幸せが一番大切だと思うから、考えてしまいます（障害児の親である教員）。

回答 20：障害児がたくさん入ってきて「それが社会」と一言で言えることが理想ですがなかなか難しいですね。小学校入学時、実は俊慈の学年に 5 人の障がい児が入りました。アスペルガー症候群が 1 人、難聴の子が 1 人、ダウン症が 2 人、身体障がいと片腕のない子が 1 人です。難聴の子は 2 年生から難聴学級が作られ移籍しました。その子は取り出しの授業でしたが知的に問題が無かったので常に学年トップでした。このような個別指導にはとても意味があると思います。アスペルガー症候群の子も勉強ができるが、いろいろと問題が起きます。4 年生からは学年 2 クラスになったので、1 クラスに常に障がい児が 2 人という状態でした。先生方の間では、「俊慈は歌うことが好きで、もし授業中に歌ってしまったら、過敏なアスペルガーの子がそれに耐えられるか？」と議論になっていたそうですが、子ども同士の注意でうまくいっていました。低学年の時に「補助教員をつけてほしい」と頼んでも「予算がない」といわれたので地域のボランティアさんや教職を目指している学生さんの空き時間に付き添いをお願いし、学校支援ボランティアという形をとりました。いろいろと工夫はできると思います。

4-2. 6 月 6 日

質問 1：学校の授業に普通の子と一緒にちゃんとついて行けますか？テストもみんなと同じものをうけていますか？

回答 1：学習面はついていけません。知的障がいがあるので勉強面はかなり遅れます。テストは同じように受けています。定期テストもです。点が取れないときもありますが、選択問題などで○（正解）をもらってくることもあります。

質問 2：授業についていけない分は家庭でどんなフォローをしていますか？

回答 2：小学校のうちは宿題もたいした量ではないのでコツコツ漢字練習だったり、数を数えたり、足し算をしていました。支援級は個別指導があるのでその分を家でやれることが理想ですね。低学年の時は「あと少しでみんなに追いつくのでは」と迷いましたが、「取り出し」（算数や国語の時間だけ別の部屋で個別指導すること）を希望することはしませんでした。「取り出し」の時間、クラスから抜けることがもったいないと考えたからです。年少から公文式を始めました。算数と国語をやっていたのですが算数は断念。今は国語と英語を続けています。

質問3：全く補助を受けないで授業に出ているのですか？

回答3：小1の時は「補助教員はつけられない」と言われました。学校側の言い分は「支援学級に入るべき子を母親が勝手に通常学級に入れたのだからお母さんがつくべき」ということです。夏休みまで付き添っていました。市教委を交えての話し合いを経て2学期から補助教員が1日に1時間ほどつくようになりました。中学2年の今は週に10時間補助教員の時間を同級生のG君と2人で分けて主に技能教科についてもらっています。たとえば、美術、技術、家庭科などです。

質問4：ダウン症の子が2人いると聞いたが、学習進度などの違いはあるのでしょうか？

回答4：学校の先生ではないのでよく分かりませんが、2人とも同じように普通級でやってきています。

質問5：ダウン症の子が通常クラスにいて周りの子達の勉強が遅れたりすることがあるかもしれません。そのことで他の親からのクレームや「なぜ支援級ではなく普通級にいるのか」という批判中傷はないのですか？

回答5：多分あると思うが私の耳には入ってきてません。1年生の時は私も1日の大半を付き添っていたので何もいわれませんでした。しかし学校の先生からのクレームはたくさんありました。他の保護者は授業参観などで見てくれるので「がんばってるね」と励ましてくれました。他のお母さんたちを味方にしてつながりを作ってきました。

質問6：身体障がいや、足の悪い子や、暴れてしまう、騒いでしまう子も普通級に入ることについてはどう思いますか。

回答6：普通学級に入るべきだと思います。畝部小学校はとても歴史のある学校だが、エレベーターが校舎についたのが5年前。近隣の学校にはすでについていました。エレベーターが設置されたのは今4年生になった足に障害のある子が2人入学してくることになったからです。豊田市は毎年一校要望があればエレベーターをつけるので、増築してエレベーターと身障者用トイレができたのです。それまでは身体障がいの子どもは畝部小学校に来ずにどこに行っていたんでしょうか？この2人のおかげでバリアフリーに近づきました。結果、足をけがしている子や妊娠している先生や「みんな」に優しい学校になっています。

多動の子は診断を受けていない子も含めクラスに必ず1～2人はいるようです。1人が歩き出すとあとにつづく子もいたりします。パニックを起こす子は俊慈の友達にもいるが、いつもパニックを起こしているわけではないです。周りの子はだんだん慣れてくるのでその子を落ち着かせることができるようになります。みんながその子を理解できているということです。脱走してしまう子は学校にとっても問題だが、手の空いている先生がいれば追いかければよいことだと思います。

質問7：いじめはありましたか？

回答7：何をいじめとするかによるが、「なかった」です。もちろん「からかい」は

あったと思いますが、深刻なのはなかったです。私は「ちょっとできない子、ちょっとできる子」がからかわれたりいじめられたりするのではないかと考えています。「できない、できなさすぎる子」は逆に保護の対象になります。いたわられたり。いじめに強い子を育てることも大切だと思います。これからの人生でもそういうことには必ず出合うはずですから。

質問 8：学校の先生からのクレームはどんなことでしたか？

回答 8：入学当初の校長、教頭は「障害児はこっち」と分ける先生でした。俊慈も特に「いい子」だったわけではなく、お友達をたたいたりするなど頭を悩ますことをしでかしてました。それをすべて「普通級にいるストレスのせい」と決めつけて支援級に移ることを強要してきました。また、プールの授業が始まるときに母親と一緒に入ることを強制してきました。話し合いをしても歩み寄れず、市教委に相談に行く旨を伝えたら「じゃあ様子を見ながら、いつでもお母さんがプールには入れるように」と校長が姿勢を変えました。結局何事もなく終わりましたが、今思うとこの件が一番のクレームでした。

質問 9：合宿について行かないことに不安はなかったんですか？

回答 9：ものすごく不安でした。豊田市もみよし市も 4 年生まで普通級にいる子たちが、5 年生になると支援級に移る事が多いんです。それは「キャンプには親が付き添って下さい」という注文がついて、いくら話し合っても無理で「泣く泣く」転籍するということです。支援級だと付き添いがいないからです。うちの場合は「教育介護ボランティア」制度を使って学生ボランティアに付き添ってもらいました。中学校の合宿も同じ制度を利用しました。

質問 10：敝部さんの周りはとてもいい人ばかりでサポートしてくれるのがいいと思いますが、そういう環境にない人はどうしたらいいんでしょうか？

回答 10：私の周りのみんながみんな賛成してくれたわけではないですが、俊慈は小さいときから地域で育っており、みんなに成長を見守ってもらっています。お母さんのコミュニケーション力は必要かもしれません。いろんなつながりを持つといいです。例えば PTA の役員とか。

質問 11：俊慈君を高校に入れたいと言っていたが、高校は普通学級に入れたいと思っていますか？

回答 11：私が大事にしたいことは、障がいがあるから養護学校高等部という流れがずっとあるのでそれを変えていくことです。それしかないという考えを変えたいんです。もちろん俊慈に普通高校を受験させたいと思っています。

質問 12：テレビで重度心身障害児を普通学級に入れたいという特集をやっていたが、本当に重度で目しか動かせない子でした。それを見てサポートのしっかりしている支援学級や支援学校に行った方がいいのでは？と思いました。この件についてどう思いますか？

回答 12：私と私の子供達がその子に初めて会った時、正直に言って驚きました。そ

して、そんな自分に嫌悪を感じました。もっと小さいときから触れ合っていたらそんな気持ちにならなかったと思いました。医療的ケアも看護師がいれば何とかなると考えています。でもとても難しい問題です。設備の整った学校というのは今の日本では無理なので（看護師のいる養護学校でも親が別室待機している）、それなら看護師配置をして地域の学校に行った方がいいと思います。

質問 13：畝部さんが普通学級にこだわる理由は？（野崎）

回答 13：こだわり、という概念はありません。みんな一緒に育つのが当たり前ですから。理由があるとすれば、子ども時代の経験によります。自閉症の子と小中学校ずっと一緒に当たり前に過ごしてきました。支援級のある中学に入ったとき支援の子達を見て「なぜこの子たちは一緒に体育をしないのか？」など疑問に思いました。一緒に過ごしてないので彼らについての記憶はほとんどありません。障がいのある子にも同窓会や成人式で普通に再会を喜べるそんな関係を築いてほしいと思っています。

質問 14：以前、特殊学級にいる発達障害児のお母さんから話を聞いたが、子どもには算数ではなく、「時計の読み方」などを教えてもらいたいといわれました。特殊に入ればよかったと思ったことはありませんか？

回答 14：1度もないです。時計の読み方もアナログは難しくてもデジタル時計があります。おつりの計算ができなくても電卓があります。きっとそのお母さんは身辺自立を希望しているのではないのでしょうか。特殊では時計とお金の計算を教えています。

質問 15：学校以外で何か活動や習い事をしていますか？得意なことはありますか？

回答 15：スイミングと公文式と和太鼓チームと親の会のダンスチームに入っています。特技は1人ミュージカル。レ・ミゼラブルにはまって1人で歌って踊っています。歌と踊りが大好き。学校で見ていると得意なことは「気配り」かなと思います。

質問 16：今は障がいを持つ子がクラスにいて当たり前だと思いますが、実際の小中学校の先生の障がいへの理解度はどのくらいですか？

回答 16：小学校入学時は皆無でした。先生方は障がい児と接したことがほとんどなかったんです。対策として毎年担任が変わる度にダウン症関連の本や親の会の会報を渡して伝えてきました。実際に俊慈と関わって変わってきたと思います。かえって知識のない先生の方が「俊慈自身を見てください」とお願いしやすかったし、色眼鏡で見られることもなかったです。

質問 17：周りの友達に助けられたエピソードを教えてください。

回答 17：常に助けられてきました。4年生で転校してきた女の子がたまたま通学団も一緒によく面倒を見てくれました。中学校1年生の途中まで一緒に自転車で登校してくれました。彼女は職場体験も一緒に打ち合わせから一緒に行ってくれました。もう一つは小学校3年生から自転車の練習をしていましたが、「あともう少し」というところでなかなか乗れませんでした。ある休みの日に練習していたら同級生たちがいて、わいわいやりながら様子を見ていてくれました。同級生が手を貸して「ちょっとやってみ」で、乗ることができました。これが一番のエピソードかもしれません。

5. 受講学生の反応

2日間ともに同じ内容で話題提供を行ったが、受講学生の反応は異なった。事後学習の内容を集計すると、2日目のクラスにインクルーシブ教育への否定的意見が多く見られた（野崎・畝部，全国保育士養成協議会第52回研究大会で2013年9月5日にポスター発表）。この2日目のクラスでは、医療的ケア（看護師配置）の必要な子どもの普通学級への就学について質疑応答が行われた後に、クラスの雰囲気が変わったように感じられた。去年（2011年），名古屋市内の小学校の普通学級に医療的ケアの必要な重度障害の女の子が入学した。その前年から就学へ向けて県教委や市教委や河村市長と交渉，要望している様子がテレビや新聞で取り上げられてきたので知っている学生も多かったのだろう。人工呼吸器を着けてベッドに横たわっているその子の姿を見て共に学ぶことが難しいと感じたのだと思う。話題提供者は，インクルーシブ教育に疑問を呈した学生の意見に妥協することなく自身の考えを率直に伝えた。このやり取りの有無が，2クラスで反応が異なった理由であると考えられた。後日，話題提供者に送付された意見書（手紙）の内容は，1日目のクラスと比べて「（特別支援教育に）分けた方がいい」という意見が目立った。

2日間に共通した質問としては，「授業についていけるのか」，「学習面における家庭の支援」等，教室内の生活や学習面について，が多かった。意外だったのは今年国内で認可された新型の出生前診断に関する質問がほとんど出なかったことである。今後は，このような実践を複数年に渡って行い，感想文，質問紙を蓄積し，それらを数量的に集計し，実践の効果をより客観的に検証することを試みる予定である。

謝 辞

授業に参加して下さった，本学教育学部の大森隆子教授，山田真紀准教授，2013年度野崎ゼミ生の岩井美侑季，木村紗帆，小出愛，高桑未帆，辻真由香，三宅ひとみ，山村真里奈，山本美貴，および畝部の友人である相山女学園大学卒業生の鈴木はる美の各氏に深く感謝いたします。

■参考文献

- 片桐健司（2009）障害があるからこそ普通学級がいい。千書房。
- 北村小夜（1987）——一緒にいいならなぜ分けた——特殊学級の中から——。現代書館。
- 京都ダウン症児を育てる親の会 トライアングル（2011）あなたに伝えたいこと——染色体異常の子どもを持たれたご両親のために——。自費出版，<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/angle-3/>よりダウンロード可能（2013年11月24日閲覧）。
- 文部科学省 web site 特別支援教育について資料：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1321536.htm（2014年1月13日閲覧）
- 杉山登志郎（2007）発達障害の子どもたち。講談社現代新書1922，講談社，東京。
- 柘植雅義（2013）特別支援教育。中公新書2218，中央公論新社，東京。